

湯目補隆氏関係資料一斑（二十訂稿）
—日本統治下台湾警察史・明治警察史の一齣—

（令和4（2022）年7月15日（金）現在）

〔目 次〕

【註記】	2
【掲載経緯】	3
1 はじめに	5
2 湯目補隆とは誰ぞ	6
(略年譜 1) 全体抄	7
(略年譜 2) 台湾関係抄	13
3 国立公文書館関係	14
4 国立国会図書館所蔵本（※：デジタルコレクション所蔵）	16
5 nacsis webcat 関係文献（現在 CiNii）	17
6 湯目補隆氏その他著作抄	18
(1) 一般	18
(2) 漢詩	19
7 湯目補隆氏関係文献	20
(1) 後藤新平関係	20
(2) 鷺巣敦哉関係	21
(3) 秋田高校史、仙台一高史関係	21
(4) 上村直己氏関係	22
(5) 石川實氏関係	22
(6) 亀井兎夢氏関係	22
(7) 台湾・『警察監獄学雑誌』関係	24
(8) その他-1	24
(9) その他-2	25

【註記】

*1 本 HP 別稿「佐倉孫三及び湯目補隆両氏の足跡について一領台初期の日本人関係文献一」（HP 初出: 平成 22（2010）年 6 月 15 日（火）初稿作成）参照。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakurayunome.pdf>〉

*2 現在台湾では「湯目補隆」について更に詳しいことが判明しているが、本稿はそれを踏まえていない。あくまでその判明以前の知識で記載しているものであることをお断りしておく。いずれ補正する機会を得られればと願う。（平成 26 年 12 月 23 日追加）

*3 平成 29（2017）年 7～8 月に、久松定弘の研究者でもられる石川實氏より湯目補隆について貴重な御示教を頂戴し、それに基づき本稿を一部補訂した。石川氏の御厚情に深甚な謝意を表する次第です。（平成 29 年 9 月 3 日追加）

*4 石川實氏「久松定弘と湯目補隆の研究回顧」『大警視だより』続刊第 5 号（通巻第 34 号、平成 30（2018）年 1 月 1 日刊）が出されたことにより、本稿の一部を更に補訂した。（平成 29 年 11 月 26 日追加）

*5 国立国会図書館次世代デジタルライブラリーですべて再検索の要ありか。

〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉（令和 4（2022）年 4 月 1 日追加）

【掲載経緯】

- HP 初載:
- ・平成 21 (2009) 年 10 月 29 日 (木) 初稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 2 日 (月) 改訂稿作成
(略年譜、『後藤新平』、仙台一高史、秋田高校史補正、追加等)
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 11 日 (水) 二訂稿作成
(「(略年譜 2) 台湾関係抄」追加、全体にわたり一部修正)
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 14 日 (土) 三訂稿作成
(全体補正)
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 23 日 (月) 四訂稿作成
(後藤新平関係を中心に全体補正)
 - ・平成 22 (2010) 年 1 月 24 日 (日) 五訂稿作成
(副題に「明治警察史の一齣」を追加。上村直己氏御著作により全体補正)
 - ・平成 22 (2010) 年 3 月 14 日 (日) 六訂稿作成
(全体補正)
 - ・平成 22 (2010) 年 6 月 10 日 (木) 七訂稿作成
(皓星社「雑誌記事索引集成データベース」検索で追加等)
 - ・平成 22 (2010) 年 8 月 23 日 (月) 八訂稿作成
(『富士川游先生』(「富士川先生」刊行会、昭和 29 年 11 月 6 日刊) の件追加等)
 - ・平成 22 (2010) 年 10 月 25 日 (月) 九訂稿作成
(「7 湯目補隆氏関係文献 (1) 後藤新平関係」文献を追加補正)
 - ・平成 24 (2012) 年 2 月 21 日 (火) 十訂稿作成
(「国立国会図書館のデジタル化資料」で文献を追加補正。<http://dl.ndl.go.jp/>)
 - ・平成 25 (2013) 年 11 月 1 日 (金) 十一訂稿作成
(「7 湯目補隆氏関係文献」に「(6) (⇒現在は (7)) その他-2)」を追加。その他一部補正。)
 - ・平成 26 (2014) 年 12 月 23 日 (火) 十二訂稿作成
(「7 湯目補隆氏関係文献」に「(5) 『警察監獄学雑誌』関係」を追加。その他一部補正。)
 - ・平成 27 (2015) 年 1 月 28 日 (水) 十三訂稿作成
(「「2 湯目補隆とは誰ぞ (略年譜 2) 台湾関係抄」中に台湾当時の肖像の件を追加。その他一部補正。)

- ・平成 27 (2015) 年 4 月 19 日 (日) 十四訂稿作成
(G.L.ウルメン著・亀井兎夢監訳『評伝 ウィットフォーゲル』(新評論、平成 7 年 1 月 20 日刊) 監訳者亀井兎夢関連記載を追加)
- ・平成 29 (2017) 年 9 月 3 日 (日) 十五訂稿作成
(石川實氏の御示教を受け一部補正、追加。)
- ・平成 29 (2017) 年 9 月 23 日 (土) 十六訂稿作成
(亀井兎夢氏『週刊埼玉』掲載記事を紹介、一部補正、追加。)
- ・平成 29 (2017) 年 11 月 26 日 (日) 十七訂稿作成
(石川實氏新論考により一部補正、追加。)
- ・平成 31 (2019) 年 2 月 22 日 (金) 十八訂稿作成
(レイアウトを一部変更の上、全体にわたり一部補正、追加。)
- ・令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 十九訂稿作成
(レイアウトを全面変更の上、全体にわたり一部補正し、『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録【参考篇】【附篇】一ローマ法・法制史学者著作目録選(第十五輯)一』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) に収録した。)
- ・令和 4 (2022) 年 7 月 15 日 (金) 二十訂稿作成
(一部補正した。)

1 はじめに

・周知のように、湯目補隆（ゆのめ すけたか¹、1858～1936²）は、明治中葉警官練習所に於けるヘーン大尉の訳官³として、明治警察史上著名な人物。他方、日本統治下台湾警察史上では、台湾総督府警察官及司獄官練習所初代所長として、記憶すべき人物。

・昭和 48（1973）年 1 月 26 日台北市牯嶺街⁴の某古書攤にて、『台湾大観』（日本合同通信社、昭和 7 年 12 月 25 日刊。台北・成文出版社、1985（昭和 60）年 3 月影印本あり。）を購う（当時購入価格新台幣 200 元）。同書中「台湾の回顧（1）」で、佐倉孫三及び湯目補隆両氏のことを初めて知る⁵。

・同書 154～159 頁：佐倉孫三（1861～1941、領台初期の警察署長、弁務署長等、漢学者、『警士之亀鑑』、『台風雑記』等の著者）「三十七年前の夢」、同書 97～104 頁：大東学人「旧雨会の人とその思い出」、その他：同書 140 頁

・同書 169～175 頁：湯目補隆「追憶三題」

・両氏は、日本統治下台湾初期警察史及び明治警察史検討上興味ある人物。

・佐倉孫三については先に検討したこと⁶から、本稿では、湯目補隆を取り上げる。湯目補隆も明治警察史及び日本統治下台湾警察史両分野で検討すべき人物。

・湯目補隆の肖像は、警察関係著作では見出し難い。管見では、僅かに、『仙台中、一高百年史』（宮城県仙台第一高等学校創立百周年記念事業実行委員会、平成 5 年 1 月 30

¹ 「湯目補隆」の「補隆」の読み方（すけたか）は、従来一、二の書籍で既に「すけたか」としていたものもあったが、ここでは、鶴見祐輔（1885～1973）『（決定版）正伝 後藤新平 3 台湾時代 1898～1906 年』（一海知義・校訂、藤原書店、平成 17 年 2 月 28 日刊）21 頁に拠る（平成 21 年 11 月 1 日追加）。その後、上村直己（1939～）「警官練習所の訳官たち」『日本古書通信』第 677 号（昭和 60 年 12 月号、同年 12 月 15 日刊）3～5 頁で確認し得た（平成 22 年 1 月 24 日追加）。

² 湯目補隆の没年は長く不明であり、本稿では旧二高資料等から従来「1858～？」（昭和十年代初め頃か？）としてきたが、平成 29（2017）年 7 月に石川實氏の御教示で昭和 11（1936）年と判明した。（平成 29 年 9 月 3 日追加）

³ ヘーンの講義録として、※『警察講義録』（ヘーン[他]、博聞社、明治 19 年 6 月刊（日本立法資料全集 別巻 447。信山社出版、平成 19（2007）年 6 月刊 東京 出版者 信山社出版、タイトル 警察講義録 / 井・ヘーン講述；湯目補隆、久松定弘、大井和久、朝比奈又三郎口譯；井土経重筆記 注記 博聞社 明治 19A 年刊の複製）がある。なお、筆記者井土経重（靈山、1859～1935）の検討も重要である。追って、掲載予定の別稿に譲る（*）。（「なお」以下、平成 22 年 1 月 24 日追加）

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%95%E5%9C%9F%E9%9C%8A%E5%B1%B1>〉

（*）井土経重については、その後、本 HP 別稿「明治中葉警官練習所訳官久松定弘等及び筆記者井土経重（靈山）検討一斑—明治警察史の一齣—」（HP 初出：平成 22（2010）年 5 月 6 日（木）初稿作成）で言及した〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yakkan.pdf>〉。（平成 22 年 6 月 10 日追加）

⁴ 当時の牯嶺街は、有名な古書攤街であった。同街の古書店は、その後まもなく牯嶺街から光華商場に移転したが、これらについては、李志銘『半世紀旧書回味：從牯嶺街到光華商場』（群学出版有限公司、2005（平成 17）年 4 月刊）が興味深い。

⁵ 佐倉孫三及び湯目補隆両氏については、同時期に購入した『児玉藤園將軍』（拓殖新報社、大正 7 年 8 月 25 日刊）前輯 134 頁（佐倉孫三）、後輯 88～92 頁（湯目補隆）にも出ていた。（平成 21 年 11 月 14 日追加）

⁶ 本 HP 別稿「佐倉孫三氏関係資料一斑 —日本統治下台湾警察史の一齣—」（平成 21 年 10 月 2 日初稿、平成 22 年 6 月 10 日十二訂稿）参照。〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakura001.pdf>〉

日刊) 口絵 7 頁 (校長在任 (第 2 代): 明治 28 年 9 月~29 年 7 月) 及び『秋高百年史』
(秋田県立秋田高等学校同窓会、昭和 48 年 9 月 1 日刊) 口絵 7 頁 (校長在任 (第 16 代):
明治 43 年 9 月~大正元年 10 月) を知るのみ。(平成 21 年 11 月 2 日追加)

・湯目補隆の生年、ドイツ語修得の件、渡台までの事績については、上村直己(1939~)
「警官練習所の訳官たち」『日本古書通信』第 677 号(昭和 60 年 12 月号、同年 12 月 15
日刊) 3~5 頁(湯目補隆、久松定弘、大井和久、賀来熊次郎)、同『明治期ドイツ語学者
の研究』(多賀出版、平成 13 年 3 月 31 日刊)(湯目補隆: 62、63、206、207 頁) が詳
しく、貴重である。(平成 22 年 1 月 24 日追加)

2 湯目補隆とは誰ぞ

・湯目補隆は、安政 5 (1858) 年 4 月 15 日仙台に生まれ、東京府籍(元は仙台市⁷)、明
治初めに上京し、ドイツ語を修得(ここの分: 平成 22 年 1 月 24 日追加)、明治 10 年代終
り頃、東京の警官練習所でヘーン大尉の訳官をする。同 20 年代初め、内務属から第三高
等中学校教諭となり、その後、独澳両国に遊学。帰国後、陸軍幼年学校嘱託、第二高等学
校独逸語講師嘱託を経て、宮城県尋常中学校長になる。また、この時期、「後相馬事件」で、
後藤新平(1857~1929)に関係している。明治 30 (1897) 年、領有後の台湾に渡り、台
湾総督府警察官及司獄官練習所の初代所長を勤める。その履歴、業績については、例えば
高橋雄豺(1889~1979)『明治警察史研究』第 1 巻「明治年代の警察幹部教養」(令文社、
昭和 35 年 3 月 1 日刊) 50~52、72、101、165、166 頁にも一部見られる⁸が、秋田県立
秋田中学校長辞職後の大正期以降のことは判然とせず、なお今後の課題か。

・雅号は「北水」(「北水湯目補隆」)(例えば、ブルンチリ [ブルンチュリー] 著、湯目補
隆訳『政党論 上冊』(九春社、明治 16 年 11 月刊) 序、湯目補隆『独逸帝国会議事堂列
席図』(大阪・岡島宝文館、明治 22 年 3 月 27 日刊) 末尾に拠る。)(平成 21 年 11 月 2
日追加)

⁷ 佐藤直次(1910~2003)「宮城県人がなぜ多かった台湾警察」『八甲会誌』(創立三十五周年記念発行、
宮城八甲会、昭和 62 年 6 月 15 日刊) 93 頁は、「仙台市連坊小路」といい、上記上村直己「警官練習所
の訳官たち」3 頁は、「仙台の南町通」という。(平成 21 年 11 月 11 日追加、同 22 年 1 月 24 日一部修
正)

⁸ 高橋雄豺(1889~1979)『明治警察史研究』第 1 巻 52、161、162 頁では、湯目補隆と後藤新平との接
点を、後藤が警官練習所で「衛生法講義 内務三等技師 後藤新平」を講義したこと及び湯目と時を同じ
くしての渡欧等に求めている。このうち、「衛生法講義」は明治 21 (1888) 年の同所警部第 4 期に至っ
て初めて加えられた科目であり(162 頁)、湯目はその頃は既に大阪の第三高等中学校に在職しているこ
と、また、「後相馬事件」に関する明治 27 (1894) 年 3 月時のことについて、「伯 [後藤新平] と多年
の知己たりし湯目補隆は、……………」(鶴見祐輔(1885~1973)編『後藤新平』第 1 巻(後藤新平伯
伝記編纂会、昭和 12 年 4 月 13 日刊) 642 頁) ということからして、本稿四訂稿作成(平成 21 年 11 月
23 日)時点では、「後藤新平との接触は、その後の欧州留学の頃かとも思われる。なお、後藤の欧州留
学期間、は明治 23 (1890) 年 4 月 5 日(横浜出帆)~明治 25 (1892) 年 6 月 10 日(横浜着)である。
(平成 21 年 11 月 23 日追加)」とした。しかるに、今回、湯目の明治初めの経歴が判明し、湯目、後藤
両氏が、春風社の司馬凌海(1840~1879)と関係あること、湯目氏が法医学を修得していること等から
して、警官練習所の件以前より両氏は接点があるものと思われるに至った。(平成 22 年 1 月 24 日一部修
正、同年 3 月 14 日修正。)

(略年譜 1) 全体抄

・本稿三訂稿作成(平成 21 (2009) 年 11 月 14 日)時点では、「生年不明、生地はおそらく仙台、独語習得の経歴等不明。」と記載したが、その後、これについては、夙に上村直己氏(1939～)の御著作があって、かなりのことが判明していることを知った⁹。これよりすると、当時の各勤務校履歴書、「私塾開業願」での申請者の「教員履歴」等でいろいろわかるようである¹⁰。無知を恥ずる次第である。以下、ここでは、安政 5 (1858) 年～明治 13 (1880) 年 2 月の件を中心に、同氏御玉稿「警官練習所の訳官たち」等より引用させていただく。同氏御著作で知った内容については、各冒頭に*印を付した。厚く御礼申し上げるものである。(*印分: 平成 22 年 1 月 24、31 日追加、一部修正)

- ・*安政 5 (1858) 年 4 月 15 日 仙台の南町通に生まれる。
- ・*明治初年 東京に出、司馬凌海(1840～1879)¹¹の春風社において初めてドイツ語を学ぶ。
- ・*明治 7 (1874) 年 4 月 東京外国語学校(所謂旧外語)¹²入学
- ・*明治 9 (1876) 年 2 月 東京外国語学校(所謂旧外語)退学
- ・*明治 9 (1876) 年 3 月 警視医学校¹³貸費生徒を申し付けられる。

⁹ 上村直己「警官練習所の訳官たち」『日本古書通信』第 677 号(昭和 60 年 12 月号、同年 12 月 15 日刊)3～5 頁(湯目補隆、久松定弘(1857～1913)、大井和久、賀来熊次郎(1860～1939))、同『明治期ドイツ語学者の研究』(多賀出版、平成 13 年 3 月 31 日刊)。後者は、久松定弘、賀来熊次郎に、各一章を設けて論じている(久松定弘: 57～79(「第 3 章 久松定弘と『独逸戯曲大意』」)、139、206、207 頁。大井和久: 63、145、206、207、289 頁。湯目補隆: 62、63、206、207 頁。賀来熊次郎(1860～1939): 52、53、63、201～219(「第 5 章 第五高等学校教授 賀来熊次郎」)、285 頁。)

¹⁰ 上村直己『近代日本のドイツ語学者』(鳥影社、平成 20 年 10 月 7 日刊)「あとがき」では、近年こうした調査が困難になっている事情が記載されている。(平成 22 年 3 月 14 日追加) なお、湯目の履歴につき、『東京教育資料大系』第 4 巻(東京都立教育研究所、昭和 47 年 3 月 10 日刊)253～254 頁参照。(平成 29 (2017) 年 9 月 3 日追加)

¹¹ 司馬凌海(幼名:島倉伊之助)については、周知のように、司馬遼太郎(1923～1996)『胡蝶の夢 1～5』(新潮社、昭和 54 年刊。文庫本等あり。)で、副主人公として取り上げられている。

< <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%B8%E9%A6%AC%E5%87%8C%E6%B5%B7> >
< <http://www.city.oshu.iwate.jp/shinpei/rel/06.html> >

なお、萩野由之(1860～1924)「司馬凌海」『佐渡人物誌』(佐渡郡教育会、昭和 2 年 10 月 20 日刊)155～159 頁参照。(ここのみ、平成 22 年 3 月 14 日追加)

その後、永田俊一「司馬凌海—信託プラットフォーム記述の試み」『まんじ』第 148 号(発行人: 三戸岡道夫、平成 30 年 5 月 1 日刊)4～32 頁、同「司馬凌海」『大警視だより』続刊第 6 号(通巻第 35 号、大警視川路利良研鑽会、平成 30 年 7 月 1 日刊)2～5 頁が出ている。

(ここのみ平成 31 年 2 月 22 日追加)

¹² 『東京外国語学校沿革』(東京外国語学校、昭和 7 年 11 月 20 日刊)参照。(平成 22 年 1 月 21 日刊)
< <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1466063> >

¹³ 本 HP 別稿「裁判医学校乃至警視医学校関係文献一斑 —明治警察史の一齣—」(HP 初出: 平成 22 (2010)

- ・*明治 11 (1878) 年 3 月 警視医学校廃校と同時に、東京大学医学部 (予科)¹⁴に入学 (2 年間研鑽) (⇒中退か?)
- ・*明治 12 (1879) 年 12 月 原田貞吉 (1852~1932) その他 (高木友枝 (1858~1943) : 平成 22 年 8 月 23 日追加) とはかり、ドイツ医学を宗とする雑誌『中外医事新報』の創刊に参加、第 1 号 (明治 13 年 1 月刊?) ~ 第 85 号 (明治 16 年 9 月 25 日刊) の印刷長を務める¹⁵。
- ・*明治 13 (1880) 年 2 月 本郷区湯島南門町 16 番地に進学舎なる私塾を開き、主に東京大学医学部に入学を希望する者に対し、独逸学、英学、羅甸語、文学、精理学等を教える。この塾は、久松定弘 (1857~1913) の理文学舎を引き継いだもの。私学開業願によると、湯目は、当時下谷区西黒門町 4 番地に居住¹⁶。
- ・処女著作: 湯目補隆編訳『泰西医学沿革史』 (小笠原美治、明治 13 (1880) 年 6 月刊) 刊行 (ただし、近代デジタルライブラリーには掲載なし。) (平成 21 年 11 月 14 日追加)

年 1 月 23 日 (土) 初稿作成) 参照。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/saiban001.pdf>〉ちなみに、同稿で引用した『警視庁史稿 上巻』 (警視庁蔵版、明治 26 年 9 月 30 日刊) 及び『警視庁史稿 下巻』 (警視庁蔵版、明治 27 年 3 月 31 日) の翻刻本等について、一、二言及しておく。

・『警視庁史稿 上巻』〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/785266>〉

・『警視庁史稿 下巻』〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/785267>〉

戦前の翻刻本等として、『庁府県警察沿革史 其ノ一 (警察研究資料第八輯)』 ((警視庁史稿 上巻)、内務省警保局、昭和 2 年 3 月 28 日刊)、『庁府県警察沿革史 其ノ二 (警察研究資料第九輯)』 ((警視庁史稿 下巻)、内務省警保局、昭和 2 年 3 月 28 日刊) 及び『庁府県警察沿革史其ノ二附録 (警察研究資料第九輯附録)』 ((警視庁史稿類別目次、警視庁史稿編年目次)、内務省警保局、昭和 2 年 11 月 30 日刊) がある。本翻刻本は、親本各頁横欄外に付されている巻数、年月日等が省略されているため、検索に不便であるが、新たに、『其ノ二附録』を付け、検索に資している。本翻刻本の戦後の復刻本 (原書房、昭和 48 年 12 月 20 日刊) では、上記附録を復刻していないので、検索は極めて難しい。(平成 22 年 1 月 24 日追加) なお、青柳精一 (1924~) 『近代医療のあけぼの—幕末・明治の医事制度—』 (思文閣出版、平成 23 年 6 月 10 日刊) には、裁判医学校乃至警視医学校の記述は存在しない。(平成 31 年 2 月 22 日追加)

¹⁴ 『東京大学百年史 通史 1』 (東京大学、昭和 59 年 1 月刊) 530 頁: 「最後に予科への特殊な入学生として、(中略) 明治 11 年 3 月の警視庁所管警視医学校生徒 55 名が挙げられる。後者は明治 8 年 9 月創設以来デーニッツ [1838~1912] が教師となっていたが、この年 4 月同校変則生の卒業後に廃止するに至り、正則生を東京大学医学部¹⁴に移したものである。」 (平成 22 年 1 月 24 日追加)

¹⁵ 『富士川 游先生』 (「富士川先生」刊行会、昭和 29 年 11 月 6 日刊。復刻版: 『伝記叢書 27 富士川 游先生』 (大空社、昭和 63 年 3 月 21 日刊)) 15 頁参照 (富士川游 (1865~1940))。(平成 22 年 8 月 23 日追加)

¹⁶ 前掲上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』 (57~79 頁「久松定弘と『独逸戯曲大意』」) によると、久松と湯目は友人 (62 頁) であって、久松が明治 12 (1879) 年 3 月 4 日に東京府に提出した「理文学舎」なる私塾の「私塾開業願」での学校位置は「下谷区西黒門町 4 番地」 (58 頁) であり、同 13 年 3 月「理文学舎」廃校後、久松は友人の湯目補隆が同じ場所に開校した英独学塾「進学舎」で教えた。」 (62 頁) とある。このため、「本郷区湯島南門町 16 番地」と「下谷区西黒門町 4 番地」との関係はなお不詳。(追記) 「進学舎」につき上記『東京教育資料大系』第 4 巻 (東京都立教育研究所、昭和 47 年 3 月 10 日刊) 253~254 頁、「理文学舎」につき同第 3 巻 (同、昭和 47 年 1 月 31 日刊) 650~651、741 頁各参照。(平成 29 (2017) 年 8 月 31 日追加)

- ・丹羽純一郎（織田、1851～1919）：「明治十六 [1883] 年三月頃、山田喜之助、湯目補隆、漆間真学、服部誠一等と相結び、共同出版会社の業を起こしたることあり。」石井研堂（1865～1943）『明治事物起原 4』（ちくま学芸文庫、平成 9 年刊）539～542 頁 うち湯目補隆 541 頁。HP「日本語史資料の連関」丹羽純一郎（明治事物起源 第八）〈<http://kokugosi.seesaa.net/archives/20050312-1.html>〉参照。（平成 21 年 11 月 2 日追加、同年 11 月 11 日修正）
- ・明治 17（1884）年 2 月現在住所 下谷区西黒門町 4 番地（ブルンチュリー著、湯目補隆訳『政党論 上冊』（九春社、明治 16 年 11 月再版刊））奥付）（平成 21 年 11 月 2 日追加）
- （・明治 18（1885）年 3 月 6 日ヘーン大尉来日、警官練習所：明治 18 年 4 月 20 日受業開始～明治 22（1889）年 3 月 31 日廃止）
- ・*明治 18（1885）年 3 月 24 日 内務省御用掛、警保局勤務、同 4 月 4 日 警官練習所勤務¹⁷
- ・明治 18（1885）年 9 月 内務省警官練習所御用掛準（准？）判任（訳官）¹⁸
- （・明治 18（1885）年 12 月 22 日 内閣制度創設）
- （・明治 19（1886）年 2 月 内務省官制施行）
- ・*明治 19（1886）年 5 月 12 日 叙判任官二等
- （・明治 19（1886）年 6 月 内務省警官練習所御用掛（訳官）⇒要検討）
- ・明治 19（1886）年 6 月 『警察講義録』（ヘーン [湯目補隆他口訳]、博聞社、明治 19 年 6 月刊）刊
- ・明治 19（1886）年 12 月 内務省警官練習所（内務属、判任官二等）
- ・明治 20（1887）年 2 月末 第三高等中学校教諭（同校当時は大阪に所在）に転ず。
- ・明治 22（1889）年 3 月 27 日現在住所 大阪市東区島町一丁目廿番地寄留（湯目補隆『独逸帝国会議事堂列席図』（大阪・岡島宝文館、明治 22 年 3 月 27 日刊）奥付）（平成 21 年 11 月 2 日追加）
- ・明治 22（1889）年 7 月 20 日現在住所 大阪市東区島町一丁目 20 番地寄留（スタイン著、湯目補隆訳『警察正義』（湯目補隆発行、書籍売捌所 大阪・岡島宝文館、明治 22 年 7 月 20 日刊）奥付）（平成 21 年 11 月 2 日追加）
- （・明治 22（1889）年 8 月 1 日〈9 月 11 日開校式〉 第三高等中学校、大阪市東区〈現在中央区〉から京都市上京区〈現左京区〉吉田に移転）（平成 21 年 11 月 2 日追加、同 11 月 14 日補正）
- ・明治 23（1890）年 4 月 5 日現在住所 京都府愛宕郡下鴨村 22 番戸寄留（湯目補隆『国家教育論（一名尚武造士策）』（明治 23 年 4 月 5 日刊）奥付）（平成 21 年 11 月 2 日追

¹⁷ 上村氏によれば、ここは、京都大学所蔵の湯目の履歴書に拠る由。これは、旧三高資料かと思われる。京都大学大学文書館サイト〈<http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/>〉参照。（平成 22 年 1 月 24 日追加）

¹⁸ *印以外のこれら湯目の警官練習所時の履歴については、前掲高橋雄毅『明治警察史研究』第 1 巻 51、52 頁に記載されているものである。明治 18 年 9 月、同 19 年 6 月のもものは民間出版の官員録、同 19 年 12 月のもものは政府発行の職員録記載のものとの由。明治 19（1886）年 2 月の内務省官制施行により、囑託の御用掛から本官に採用されたものかとも思われる。（平成 21 年 11 月 23 日追加、平成 22 年 1 月 24 日一部修正）

加)

- ・明治 23 (1890) 年 欧洲に渡り、独澳両国に遊学¹⁹、この頃在欧中の児玉源太郎 (1852～1906) を知る²⁰。(平成 21 年 11 月 2 日修正)
- ・*明治 26 (1893) 年 ウィーンを去り、独に遊学、キール大学法学部で 5 ヶ月間修業、同年 8 月同大学退学、英米を歴遊。
- ・明治 26 (1893) 年 11 月帰朝 (11 月のみ*)
- ・この頃 児玉源太郎陸軍次官の紹介で、陸軍幼年学校嘱託²¹ (平成 21 年 11 月 14 日追加)
- ・明治 27 (1894) 年 3 月頃 後藤新平 (1857～1929) の「後相馬事件」に関与²² (平成 21 年 11 月 14 日追加)
- ・明治 27 (1894) 年 4 月 5 日現在住所 下谷区西黒門町 4 番地 (湯目補隆『法律学者ノ断訟医学ニ就テ』〈吐鳳堂、明治 27 年 4 月 5 日刊〉奥付)
- ・*明治 27 (1894) 年 9 月現在 郷里仙台の第二高等学校の嘱託教授 (1 カ月 55 円。『第二高等学校一覽 自明治 27 年至明治 28 年』(第二高等学校、明治 28 年 1 月 26 日刊) 87 頁では「独語 講師」とある。)(平成 22 年 3 月 14 日再修正)
- ・*明治 28 (1895) 年 8 月 依願解嘱 (平成 22 年 3 月 14 日追加)
- ・明治 28 (1895) 年 9 月 17 日 宮城県尋常中学校長 (第 2 代、現仙台一高)
- ・同校での教え子に吉野作造 (1878～1933) がいる²³ (吉野の在学期間: 明治 25 (1892) 年 6 月～同 30 (1897) 年 3 月)。
⇒「明治 29 年事件」発生 ⇒明治 29 (1896) 年 8 月 14 日休職²⁴
- ・明治 30 (1897) 年 9 月以前 渡台、台湾総督府民政局事務官兼台湾総督府民政局参事官²⁵

¹⁹ 遊学中の動向の一例として、湯目補隆「徳山高く水長し」『児玉藤園將軍』(拓殖新報社、大正 7 年 8 月 25 日刊) 後輯 88 頁に「……予は当時奥太利の首府維納の日本公使館から同地の大学に通つて居た……」(平成 21 年 11 月 14 日追加)、上村直己前掲「警官練習所の訳官たち」4 頁には「ウィーン大学院の国家学・法学部の正員となり修業」とある (平成 22 年 1 月 24 日追加)。

²⁰ 湯目前掲「徳山高く水長し」後輯 88、89 頁。児玉源太郎の欧洲差遣: 軍事視察として欧洲差遣、明治 24 年 6 月 1 日辞令、同 24 年 6 月 25 日横浜解纜、同 25 年 6 月下旬巴里発、同 25 年 8 月 18 日帰朝 (平成 21 年 11 月 11 日追加、同年 11 月 14 日修正)

²¹ 湯目前掲「徳山高く水長し」後輯 88、89 頁 (平成 21 年 11 月 14 日追加)

²² 後掲「7 湯目補隆氏関係文献 (1) 後藤新平関係」参照 (平成 21 年 11 月 14 日追加)

²³ 吉野作造「服部誠一翁の追憶」『新旧時代』1 年? 冊 (大正 14 年 11 月刊) (吉野作造『閑談の閑談』〈書物展望社、昭和 8 年刊〉253～260 頁に収録。未見。) 参照。(平成 22 年 3 月 14 日追加)
(<http://mpcp.hp.infoseek.co.jp/yoshinosakuzo/hattoriseichi.html>) に拠る。) なお、今野元 (1973～) 『吉野作造と上杉慎吉ー日独戦争から大正デモクラシーへ』名古屋大学出版会、平成 30 年 11 月 15 日刊) 102 頁も参照 (上杉慎吉: 1878～1929) 55～56 頁。今野氏は西田耕三 (1933～2016) 「若き日の吉野作造と仙台」西田耕三編『吉野作造と仙台』(宮城地域史学協議会、平成 5 年 9 月刊) 7～107 頁から引用されている (未見)。(平成 31 年 2 月 22 日追加)

²⁴ 「仙台一中・一高同窓会」HP <http://www.sen1.org/dosou/sen1_22.htm> ⇒

<http://www.sen1.org/sen1_start.html>

²⁵ 湯目補隆と児玉源太郎との関係について、鶴見祐輔『〈決定版〉正伝 後藤新平 3 台湾時代 1898～1906 年』(一海知義・校訂、藤原書店、平成 17 年 2 月 28 日刊) 21 頁等参照。

- ・(第4代台湾総督児玉源太郎(1852～1906)：在任：明治31年2月26日～同39年4月11日)
- ・(台湾総督府民政局長(後に民政長官)後藤新平(1857～1929)：在任：明治31年3月2日～同39年11月13日(明治31年6月民政長官に改制))
- ・明治31(1898)年6月18日 勅令第112号「台湾総督府警察官及司獄官練習所官制」発布、同年7月1日同所創設とともに、所長(総督府参事官兼任) ⇒明治36(1902)年3月まで在任。
- ・『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』(台湾総督府警察官及司獄官練習所、明治42年3月10日刊) 16～23頁によれば、湯目補隆の人事関係は、次の如し。
 - ・明治31(1898)年12月末日現在 (官職) 所長 (等級) 六等七級 明治31年6月参事官より兼務 (位階勲等) 正七位
 - ・明治32(1899)年12月末日現在 (官職) 所長 (等級) 五等六級 (明治32年7月8日昇級) 明治33年3月17日依願免官 (位階勲等) 正七位
 - ・明治33(1900)年12月末日現在 (官職) 所長 (等級) 五等六級 明治33年3月26日任官 (位階勲等) 従六位
 - ・明治34(1901)年12月末日現在 (官職) 所長 (等級) 五等六級 (位階勲等) 従六位
 - ・明治35(1902)年12月末日現在 (官職) 所長 (等級) 四等四級 (明治36年3月16日昇級) (位階勲等) 正六位 明治36年3月21日休職 ⇒明治36年3月31日警視総長兼参事官大島久満次(1865～1918)が所長兼務
 湯目補隆関連頁：15、16、17、18、20、22、83、84、196(所長告辞)、197(所長告辞)、201(所長告辞)、233頁
- ・明治36(1903)年3月21日 休職(「裏面ニ於ケル弊風ヲ一掃スルノ必要ヲ認メ ……」『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』15頁)
- ・明治40(1907)年12月22～24日 社会政策学会第一回大会(於東大)に参加(「社会政策学会資料集」〈<http://www.soc.nii.ac.jp/sssp/1taikaikiji.html>〉)(平成21年11月2日追加)
- ・明治43(1910)年9月13日～大正元(1912)年10月1日 秋田県立秋田中学校長(第16代)(当時単身にて校内居住との由)
 - 〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%8B%E7%94%B0%E7%9C%8C%E7%AB%8B%E7%A7%8B%E7%94%B0%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1>〉
- ・以下履歴詳細不明

(追記)平成29(2017)年7月に入り、石川實氏の御高論及び御教示により、湯目補隆の逝去年月日が昭和11(1936)年10月31日であること、また、湯目の妻は久松定弘(1853～1913)令妹であることを知ったが、下記はそれまでの検討経緯を記載したものであるので、そのまま残しておくこととする。石川實氏に感謝申し上げます。

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B9%85%E6%9D%BE%E5%AE%9A%E5%BC%98>〉

(平成 29 年 8 月 31 日追加)

・大正 7 (1918) 年 7 月 24 日 児玉 [源太郎] 大将十三回忌大追悼会に参列 (於築地精養軒) ²⁶

・大正 7 (1918) 年 8 月 25 日 「徳山高く水長し」『児玉藤園将軍』(児玉源太郎大将十三回忌記念出版物。拓殖新報社、大正 7 年 8 月 25 日刊) に、「徳山高く水長し」(後輯 88~92 頁) を寄稿 (平成 21 年 11 月 14 日追加)

・吉野作造 (1878~1933) 「服部誠一翁の追憶」『新旧時代』1 年? 冊 (大正 14 年 11 月刊。服部誠一: 1841~1908) (吉野作造『閑談の閑談』(書物展望社、昭和 8 年刊) 253~260 頁に収録。未見。) によれば、この頃東京在住。(平成 22 年 3 月 14 日追加、同 25 年 10 月 31 日一部補正)

(<http://snob.s1.xrea.com/fumikura/yoshinosakuzo/hattoriseichi.html>) に拠る。)

・昭和 7 (1932) 年 『台湾大観』(日本合同通信社、昭和 7 年刊〈奥付不明〉。台北・成文出版社、1985 (昭和 60) 年 3 月影印本あり。) に、「追憶三題」を寄稿

・昭和 8 (1933) 年 『台湾警察時報』第 208 号、第 212 号に、漢詩を寄稿 (平成 21 年 11 月 1 日追加)

・昭和 12 (1937) 年頃 鷺巣敦哉『台湾警察四十年史話』(自己出版、昭和 13 年 4 月 28 日刊。復刊: 『鷺巣敦哉著作集 II』(緑蔭書房、平成 12 年 12 月 10 日刊)) 287 頁では、この時点 (執筆は昭和 11 年頃) では存命とのこと。

・昭和 11 (1936) 年~昭和 13 (1938) 年 後掲「7 湯目補隆氏関係文献」中「(6) その他-2)」掲載の下記文献によれば、昭和 10 年前後の住所が判明し、昭和 11 (1936) 年~昭和 13 (1938) 年の間に逝去のことがわかる。(平成 25 年 11 月 1 日追加)

⑦ 第二高等学校同窓会編『会員名簿』第二高等学校同窓会,1935.

14 頁. (「本校旧職員」の項) 「湯目補隆/東京//講師//東京市小石川区関口台町五一問心書院」

*記載事項は氏名/原籍/学位称号/官職名/勤務先職名/住所。

⑧ 第二高等学校同窓会編『会員名簿』第二高等学校同窓会,1936.10.

14 頁. (「本校旧職員」の項) 「湯目補隆/東京//講師//東京市小石川区関口台町五一問心書院」

*記載事項は氏名/原籍/学位称号/官職名/勤務先職名/住所。

⑨ 第二高等学校同窓会編『会員名簿昭和 13 年』第二高等学校同窓会,1938.11.

20 頁. (「旧職員死亡者」の項) 「湯目補隆/東京//講師」

・G.L.ウルメン著・亀井兎夢 (とむ、1910~2000?) 監訳『評伝 ウィットフォーゲル』(新評論、平成 7 年 1 月 20 日刊。ウィットフォーゲル: 1896~1988) 奥付の「監訳者紹介」に、「1910 年 12 月 29 日東京 (旧) 下谷に生れる (久松定弘の六男)。1933 年亀井家の養子となる。1928 年東京府立一商卒。日大経済学専門部 (ママ) 2 年で中退後、叔父湯目ノ補隆 (ママ) (元大阪高校 (大阪大学) 仙台 2 (ママ) 高 (東北大学) の校長 (ママ)) の私塾にて勉学」とある。以下、一、二検討しておく。なお、同書に「監訳者あとがき 「現代

²⁶ 湯目前掲「徳山高く水長し」『児玉藤園将軍』後輯 164 頁 (平成 21 年 11 月 14 日追加)

の予言者」ーウィットフォーゲル氏の著書から六十年にわたり教え導かれるー」（879～883頁）があるが、ここには湯目補隆への言及記載はない。（平成27年4月19日追加）

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%80%E4%BA%95%E3%83%88%E3%83%A0>〉

⇒亀井兎夢が経営した『週刊埼玉』関係年分記事検討の余地ありか。

〈<http://jgaxy.tumblr.com/post/55589467142/%E9%80%B1%E5%88%8A%E5%9F%BC%E7%8E%89%E3%81%AE%E7%8F%BE%E5%9C%A8>〉（平成29年9月3日追加）

⇒下記「7 湯目補隆氏関係文献（6）亀井兎夢氏関係」参照。（平成29年9月23日追加）

・久松定弘（1857～1913）については、本HP別稿「明治中葉警官練習所訳官久松定弘等及び筆記者井土経重（霊山）検討一斑ー明治警察史の一齣ー」参照。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/>〉

・「叔父湯目ノ補隆〈ママ〉」の「叔父」については関係不詳。もとより湯目補隆は仙台の人であるからおそらく姻戚か。今後要検討。

⇒その後湯目補隆夫人は久松定弘令妹と判明。亀井兎夢は久松六男。（平成29年9月23日追加）

・叔父湯目ノ補隆〈ママ〉（元大阪高校（大阪大学）仙台2高（東北大学）の校長）の「（元大阪高校（大阪大学）仙台2〈ママ〉高（東北大学）の校長）」については、上記「・明治20（1887）年2月末 第三高等中学校教諭（同校当時は大阪に所在）に転ず。」「明治27（1894）年9月現在 郷里仙台の第二高等学校の嘱託教授」の各誤記か。なお、「・明治28（1895）年9月17日 宮城県尋常中学校長（第2代、現仙台一高）」である。

・「叔父湯目ノ補隆〈ママ〉（元大阪高校（大阪大学）仙台2〈ママ〉高（東北大学）の校長）の私塾」の「私塾」については、年代的に見ると、例えば上記「⑦ 第二高等学校同窓会編『会員名簿』第二高等学校同窓会,1935.14頁。（「本校旧職員」の項）

「湯目補隆／東京／／講師／／東京市小石川区関口台町五一問心書院」にいう「東京市小石川区関口台町五一問心書院」を指すのか。今後要検討。

（略年譜2）台湾関係抄（平成21年11月11日追加）

*1『旧植民地人事総覧 台湾編1』（日本図書センター、平成9年2月25日刊。当該年度の『職員録』（内閣官報局）から抽出したもの。）

・明治30（1897）年11月1日現在

60頁 台湾総督府 総督官房 参事官〔専任か〕 六等八級 正七 湯目補隆

・明治31（1898）年度分は作成されていない由。

・明治32（1899）年2月1日現在

115頁 総督官房 参事官室 参事官 六等（兼） 事務官湯目補隆

117頁 民政部警保課 事務官 六等七級 文官普通試験委員 正七 湯目補隆

民政部第二種官舎第十号

136頁 台湾総督府警察官及司獄官練習所 台北県艋舺 所長 六等（兼） 台湾総督府事務官湯目補隆

・明治 33 (1900) 年 4 月 1 日現在

182 頁 総督官房 参事官室 参事官 五等 (兼) 事務官 湯目補隆

183 頁 民政部警保課 事務官 五等六級 従六湯目補隆 民政部第二種官舎第十号

203 頁 台湾総督府警察官及司獄官練習所 台北県台北 所長 五等 台湾総督府事務官
兼参事官 湯目補隆

・明治 34 (1901) 年 4 月 1 日現在

258 頁 総督官房 参事官室 参事官 五等 (兼) 事務官湯目補隆

259 頁 民政部警保課 事務官 五等六級 従六 湯目補隆 書院街五丁目八番戸官舎

280 頁 警察官及司獄官練習所 台北県台北 所長 五等 (兼) 事務官兼参事官 湯目補隆

・明治 35 (1902) 年 5 月 1 日現在

341 頁 総督官房 参事官室 参事官 四等四級 (兼) 総督府事務官 湯目補隆

[民政部 湯目補隆の兼官の件なし。警保課⇒警務課及び保安課に分課。]

382 頁 警察官及司獄官練習所 台北庁大加納小南門街 所長 (兼) 事務官兼参事官 湯目補隆

・明治 36 (1903) 年 5 月 1 日現在 [湯目補隆の氏名なし。]

433 頁 総督官房 参事官室 参事官 [湯目補隆の氏名なし。]

475 頁 警察官及司獄官練習所 台北庁大加納小南門街 所長 (兼) 警視総長参事官大島久満次

*2 近年台湾の「国史館台湾文献館」なるサイトで『台湾総督府府 (官) 報』が紹介されつつあり、「湯目補隆」の名前も頻出する。要検討。(平成 22 年 3 月 14 日追加)

(例示) <<http://ds2.th.gov.tw/ds3/app007/list3.php?ID1=0071010792a008>>

*3 台湾時代の湯目補隆の肖像につき、上田元胤・湊靈雄共編『台湾士商名鑑』(にひたか社、明治 34 年 3 月 10 日刊) 掲載の「湯目警官練習所長」がある。なお、同書 34 頁には「◎台湾総督府警察官及司獄官練習所 所長五等 (兼) 台湾総督府事務官兼参事官 湯目補隆 民政部第二種官舎第十号」とある。(平成 27 年 1 月 28 日追加)

3 国立公文書館関係

(デジタルアーカイブ: <<http://www.digital.archives.go.jp/>>)

① 内務属湯目補隆第三高等中学校教諭ニ任叙ノ件

公文書>*内閣・総理府>太政官・内閣関係>第五類 諸官進退・官吏進退>官吏進退・明治二十年官吏進退二十一・文部省一

[請求番号] 本館-2A-018-00・任A00147100 [件名番号] 003 [作成部局] 内閣 [年月日] 明治 20 年 02 月 25 日 [マイクロフィルム] 002100-0922 公開

② 長野県尋常師範学校教諭羽田貞義外一名奏任文官同一ノ待遇ニ被進並湯目補隆宮城県

尋常中学校長ニ被任ノ件

公文書＞＊内閣・総理府＞太政官・内閣関係＞第五類 任免裁可書＞任免裁可書・明治二十八年・任免卷二十四

〔請求番号〕 本館-2A-018-00・任B00076100 〔件名番号〕 032 〔作成部局〕 内閣 〔年月日〕 明治28年09月17日 〔マイクロフィルム〕 001400-0332 公開

③ 宮城県尋常中学校長湯目補隆及静岡県尋常中学校長杉原正市休職認可ノ件

公文書＞＊内閣・総理府＞太政官・内閣関係＞第五類 任免裁可書＞任免裁可書・明治二十九年・任免卷二十

〔請求番号〕 本館-2A-018-00・任B00108100 〔件名番号〕 010 〔作成部局〕 内閣 〔年月日〕 明治29年08月12日 〔マイクロフィルム〕 001900-0887 公開

④ 宮城県尋常中学校長湯目補隆依願同校長被免ノ件

公文書＞＊内閣・総理府＞太政官・内閣関係＞第五類 任免裁可書＞任免裁可書・明治三十年・任免卷十二

〔請求番号〕 本館-2A-018-00・任B00135100 〔件名番号〕 036 〔作成部局〕 内閣 〔年月日〕 明治30年05月20日 〔マイクロフィルム〕 002400-1195 公開

⑤ 台湾総督府民政局事務官兼台湾総督府民政局参事官湯目補隆外一名本官被免兼官専任ノ件

公文書＞＊内閣・総理府＞太政官・内閣関係＞第五類 任免裁可書＞任免裁可書・明治三十年・任免卷二十八

〔請求番号〕 本館-2A-018-00・任B00151100 〔件名番号〕 035 〔作成部局〕 内閣 〔年月日〕 明治30年10月08日 〔マイクロフィルム〕 002800-0422 公開

⑥ 台湾総督府参事官正七位湯目補隆任台湾総督府事務官ノ件

公文書＞＊内閣・総理府＞太政官・内閣関係＞第五類 任免裁可書＞任免裁可書・明治三十一年・任免卷六

〔請求番号〕 本館-2A-018-00・任B00169100 〔件名番号〕 002 〔作成部局〕 内閣 〔年月日〕 明治31年03月15日 〔マイクロフィルム〕 003200-0415 公開

⑦ 台湾総督府事務官湯目補隆休職ノ件

公文書＞＊内閣・総理府＞太政官・内閣関係＞第五類 任免裁可書＞任免裁可書・明治三十六年・任免卷六

〔請求番号〕 本館-2A-018-00・任B00327100 〔件名番号〕 044 〔作成部局〕 内閣 〔年月日〕 明治36年03月21日 〔マイクロフィルム〕 007600-0833 公開

⑧ 湯目補隆外四名秋田県立秋田中学校外三校長任免ノ件

公文書＞＊内閣・総理府＞太政官・内閣関係＞第五類 任免裁可書＞任免裁可書・明治四

十三年・任免卷二十四

[請求番号] 本館-2A-019-00・任B00584100 [件名番号] 045 [作成部局] 内閣 [年月日] 明治43年09月13日 [マイクロフィルム] 015300-0256 公開

⑨ 独逸帝国会議事堂列席図

内閣文庫>和書>和書(多聞櫓文書を除く)

[請求番号] ヨ314-0132 [人名] 著者:湯目補隆 [数量] 1冊 [書誌事項] 活版,明治22年,大阪・岡島宝文館

⑩ 警察講義録

内閣文庫>和書>和書(多聞櫓文書を除く)

[請求番号] ヨ317-0521 [人名] 著者:イ・ヘーン(独) / 訳者:湯目補隆 [数量] 2冊 [書誌事項] 活版,明治19年,東京警官練習所

⑪ 警察講義録

内閣文庫>和書>和書(多聞櫓文書を除く)

[請求番号] ヨ317-0521A [人名] 著者:イ・ヘーン(独) / 訳者:湯目補隆 [数量] 1冊 [書誌事項] 活版,明治19年,東京博聞社

⑫ 警察正義

内閣文庫>和書>和書(多聞櫓文書を除く)

[請求番号] ヨ317-0351 [人名] 著者:スタイン(奥) / 訳者:湯目補隆 [数量] 1冊 [書誌事項] 活版,明治22年,大阪

⑬ 警察正義

内閣文庫>和書>和書(多聞櫓文書を除く)

[請求番号] ヨ317-0351A [人名] 著者:スタイン(奥) / 訳者:湯目補隆 [数量] 1冊 [書誌事項] 活版,明治22年,大阪

⑭ 国家教育論

内閣文庫>和書>和書(多聞櫓文書を除く)

[請求番号] ヨ373-0050 [人名] 著者:湯目補隆 [数量] 1冊 [書誌事項] 活版,明治23年,京都

4 国立国会図書館所蔵本

(※: 近代デジタルライブラリー <<http://kindai.ndl.go.jp/>> 所蔵 ⇒ デジタルコレクション <<http://dl.ndl.go.jp/>>)

・ 泰西医学沿革史 / 湯目補隆. -- 小笠原美治, 明 13.6 (近代デジタルライブラリー未収)

録、マイクロフィッシュのみ)

- ・ ※政党論. 上巻 / ブルンチリ [ブルンチュリー] [他] . -- 九春社, 明 17.2
- ・ ※欧米女権 / 湯目補隆. -- 九春社, 明 17.11
- ・ ※警察講義録 / ヘーン [他] . -- 博聞社, 明 19.6
- ・ ※独逸帝国国会議事堂列席図 / 湯目補隆. -- 岡島宝文館, 明 22.3
- ・ ※警察正義 / スタイン著、湯目補隆訳--湯目補隆発行、(書籍売捌所 大阪・岡島宝文館), 明 22.7.20 (冒頭に、湯目補隆「緒言」あり。貴重。当時まだ大阪にあった第三高等中学校教諭在任中のもの。大阪府警部長高崎親英(1853~1920。在任: 明治 19 年 12 月 25 日~同 23 年 12 月 25 日)の勧めによる由。大阪府警察本部蔵版)
- ・ ※国家教育論 (一名尚武造士策) / 湯目補隆. -- 湯目補隆, 明 23.4.5
- ・ ※法律学者ノ断訟医学ニ就テ / 湯目補隆. -- 吐鳳堂, 明 27.4.5
- ・ 司法医学ノ応用実地ニ就テ / 湯目補隆 [他] . -- 吐鳳堂, 明 28.8
- ・ 日本立法資料全集. 別巻 447. -- 信山社出版, 平成 19 (2007) .6 東京 出版者 信山社出版 出版年 2007.6 形態 978p ; 23cm タイトル 警察講義録 / 井・ヘーン講述 ; 湯目補隆,久松定弘,大井和久,朝比奈又三郎口譯 ; 井土經重筆記 注記 博聞社 明治 19 年刊の複製

(参考 1) 湯目補隆『尚武造士策』(前掲『警察正義』 / スタイン著、湯目補隆訳--湯目補隆発行、(書籍売捌所 大阪・岡島宝文館), 明 22.7.20) 末尾に概要記載あり。これは、前掲『国家教育論』のこと。

(参考 2) 前掲高橋雄豺『明治警察史研究』第 1 巻 52 頁指摘事項

・ 教官エ・フィガセウスキー講述、訳官末松一郎口訳『警察講義録』(警官練習所蔵版、御用印行所 東京・博聞社、明治 19 年 2 月 28 日刊、同年 7 月 5 日再刊(版を変更)。国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵) 末尾に、「書警察講義録後 訳官 湯目補隆謹識」(1~2 頁)なる湯目の漢文の「書後」がある。

5 nacsis wecat 関係文献 (<<http://webcat.nii.ac.jp/>>)

(現在 CiNii <<http://ci.nii.ac.jp/books/>>) (平成 29 年 8 月 31 日修正追加)

- ・ 泰西医学沿革史 / 湯目補隆譯纂. -- 小笠原美治, 1880
- ・ 政黨論 / ブルンチリ [ブルンチュリー] 著 ; 湯目補隆譯 ; 上冊. -- 九春社, 1883
- ・ 歐米女権 / 湯目補隆編纂. -- 九春社, 1884
- ・ 警察講義録 / ヘーン講述 ; 湯目補隆口譯. -- 博聞社, 1886
- ・ 警察正義 / [スタイン原著] ; 湯目補隆譯. -- 岡島寶文館, 1889
- ・ 國家教育論, 一名, 尚武造士策 / 湯目補隆著. -- 湯目補隆, 1890
- ・ 法律學者ノ断訟醫學ニ就テ / 湯目補隆着. -- 吐鳳堂書店, 1894
- ・ 司法醫學ノ應用實地ニ就テ / 湯目補隆講述 ; 藤根常吉筆録. -- 吐鳳堂, 1895
- ・ 警察講義録 / 井・ヘーン講述 ; 湯目補隆 [ほか] 口譯 ; 井土經重筆記. -- 復刻版. -- 信山社出版, 2007. -- (日本立法資料全集 / 杉村章三郎 [ほか] 監修 ; 芦部

信喜 [ほか] 編集；別巻 447)

(上記「3 国会図書館所蔵本」中、「・ ※独逸帝国議事堂列席図 / 湯目補隆. -- 岡島宝文館, 明 22.3」はなし。)

6 湯目補隆氏その他著作抄

(1) 一般

・湯目補隆「裁判医学上瘋癲檢鑑ノ次第ニ就テ」『中外医事新報』(日本医史学会、明治 27 年 4 月 20 日刊) 第 338 号 30~32 頁(「国立国会図書館のデジタル化資料」に所収。)(平成 24 年 2 月 21 日追加)

・湯目補隆「墺国中学生徒の規律」『少年団』第 135 号(少年団、明治 27 年 6 月 3 日刊) 2~9 頁(『復刻版 少年団』第 12 卷(不二出版、昭和 63 年 10 月 11 日刊) 78~83 頁。「国立国会図書館のデジタル化資料」に所収。)²⁷(平成 22 年 6 月 10 日追加、平成 24 年 2 月 21 日一部修正。)

・湯目補隆「墺国中学生徒の規律(前号の続)」『少年団』第 136 号(少年団、明治 27 年 6 月 18 日刊) 4~8 頁(『復刻版 少年団』第 12 卷(不二出版、昭和 63 年 10 月 11 日刊) 112~116 頁。「国立国会図書館のデジタル化資料」に所収。)(平成 22 年 6 月 10 日追加、平成 24 年 2 月 21 日一部修正。)

・湯目補隆「学窓ノ余滴」『中外医事新報』第 346 号(日本医史学会、明治 27 年 4 月 20 日刊) 30~35 頁(「国立国会図書館のデジタル化資料」に所収。)(平成 24 年 2 月 21 日追加)

・湯目補隆「学窓ノ余滴(続稿)」『中外医事新報』第 347 号(日本医史学会、明治 27 年 4 月 20 日刊) 35~40 頁(「国立国会図書館のデジタル化資料」に所収。)(平成 24 年 2 月 21 日追加)

・湯目補隆「発刊祝辞」『警察監獄学雑誌』第 1 号(台北、明治 35 年 2 月刊。未見。前掲高橋雄豺『明治警察史研究』第 1 卷 52 頁に拠る。)(平成 21 年 11 月 23 日追加)

・湯目補隆「徳山高く水長し」『児玉藤園将軍』(児玉源太郎大将十三回忌記念出版物。拓殖新報社、大正 7 年 8 月 25 日刊) 後輯 88~92 頁(記述の一部は、下記「追憶三題」と重なる。)(平成 21 年 11 月 14 日追加)

・湯目補隆「追憶三題」『台湾大観』(日本合同通信社、昭和 7 年 12 月 25 日刊。台北・成文出版社、1985(昭和 60)年 3 月影印本あり。)同書中「台湾の回顧(1)」(169~175 頁。記述の一部は、上記「徳山高く水長し」と重なる。)(平成 21 年 11 月 14 日修正、平成 22 年 2 月 27 日『台湾大観』奥付入手で訂正。)

(参考)

²⁷ 皓星社「雑誌記事索引集成データベース(ざっさくプラス)」で判明。

http://pro.maruzen.jp/ln/ec/ec_kousei01.html

<http://zassaku-plus.com/authorize.php>

・台湾時代の湯目補隆の肖像につき、上田元胤・湊靈雄共編『台湾士商名鑑』（にひたか社、明治34年3月10日刊）掲載の「湯目警官練習所長」がある。なお、同書34頁には「◎台湾総督府警察官及司獄官練習所 所長五等（兼）台湾総督府事務官兼参事官 湯目補隆 民政部第二種官舎第十号」とある。（平成27年1月28日追加）

(2) 漢詩

・湯目補隆（号北水 陸前人）「歩村上明府江瀨軒即事原韻」『竹風蘭雨集』（酒井邦之助、明治40年刊）59～60頁（未見）

〈http://memory.ncl.edu.tw/tm/cgi/hypage.cgi?HYPAGE=publication_bookj_detail.hpg&subject_name=%E9%B9%BF%E6%B8%AF%E6%96%87%E6%95%99%E5%9F%BA%E9%87%91%E6%9C%83%E5%85%B8%E8%97%8F%E8%87%BA%E7%81%A3%E8%A9%A9%E6%96%87%E8%88%8A%E7%B1%8D&subject_url=publication_bookj_list.hpg&project_id=lgbib&dtd_id=51&xml_id=0000675788〉（HP「台湾記憶」、平成21年11月2日追加）

・湯目北水「「文苑」欄 漢詩」『台湾時報』第155号（昭和7年10月1日刊）152頁 中島利郎編『『台湾時報』総目録』（緑蔭書房、平成9年2月15日刊）256頁に拠る。）（平成22年6月10日追加、8月23日一部修正）

・湯目補隆「「文苑」欄 漢詩」『台湾時報』（台湾総督府内台湾時報発行所）第157号（昭和7年12月1日刊）126頁 前掲『『台湾時報』総目録』258頁に拠る。）（平成22年6月10日追加）

・湯目補隆「「文苑」欄 漢詩」『台湾時報』第158号（昭和8年1月1日刊）170頁 前掲『『台湾時報』総目録』259頁に拠る。）（平成22年6月10日追加）

・湯目補隆「「文苑」欄 漢詩」『台湾時報』（台湾総督府内台湾時報発行所）第179号（昭和9年10月1日刊）121頁 前掲『『台湾時報』総目録』283頁に拠る。）（平成22年6月10日追加）

（参考）『台湾時報』掲載分：

・皓星社「雑誌記事索引集成データベース（ざっさくプラス）」で一部判明。

〈http://pro.maruzen.jp/ln/ec/ec_kousei01.html〉

〈<http://zassaku-plus.com/authorize.php>〉

・中島利郎編『『台湾時報』総目録』（緑蔭書房、平成9年2月15日刊）で検索

〈<http://www.amazon.co.jp/%E3%80%8E%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E6%99%82%E5%A0%B1%E3%80%8F%E7%B7%8F%E7%9B%AE%E9%8C%B2%E2%80%95%E8%91%97%E8%80%85%E5%90%8D%E7%B4%A2%E5%BC%95%E4%BB%98-%E4%B8%AD%E5%B3%B6-%E5%88%A9%E9%83%8E/dp/4897740177>〉

・湯目北水「「誌友文芸」欄 漢詩」『台湾警察時報』第208号（昭和8年3月1日刊）（原文未見。中島利郎（1947～）・林原文子（1948～）編『『台湾警察協会雑誌』『台湾警察時報』総目録』（緑蔭書房、平成10年8月25日刊）372頁に拠る。）（平成21年

11月2日追加)

・湯目北水「「読者文芸」欄 漢詩」『台湾警察時報』第212号(昭和8年7月1日刊)
(原文未見。前掲『『台湾警察協会雑誌』『台湾警察時報』総目録』386頁に拠る。)(平成21年11月2日追加)

(参考)中島利郎・林原文子編『『台湾警察協会雑誌』『台湾警察時報』総目録』(緑蔭書房、平成10年8月25日刊)

<http://www.amazon.co.jp/%E3%80%8E%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E5%8D%94%E4%BC%9A%E9%9B%91%E8%AA%8C%E3%80%8F%E3%80%8E%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E6%99%82%E5%A0%B1%E3%80%8F%E7%B7%8F%E7%9B%AE%E9%8C%B2-%E4%B8%AD%E5%B3%B6-%E5%88%A9%E9%83%8E/dp/4897740215>

7 湯目補隆氏関係文献

(1) 後藤新平関係

・『後藤新平書翰集』：後藤新平記念館所蔵 / 奥州市立後藤新平記念館編集 [コンピュータファイル(光ディスク)]. -- (BA89894387) [出版地不明]：雄松堂書店(発売), c2009 DVD-ROM1枚；12cm 注記：編集協力：中京大学社会科学研究所台湾史研究センター；製作：雄松堂アーカイブズ；「解説」の子書誌あり <BB02772093>⇒「後藤新平文書中後藤新平書翰ならびに後藤新平関係書翰の電子情報化資料版による刊行について」 / 檜山幸夫著. -- 雄松堂, 2010. -- (後藤新平書翰集：後藤新平記念館所蔵 / 奥州市立後藤新平記念館編集；解説) (nacsis webcat に拠る。未見)

⇒「後藤新平書翰集総目次」http://www.timr.or.jp/gotoh_syokan.pdfによれば、後藤新平宛湯目補隆発書翰：6通あり(同目次99頁)。その他、湯目補隆と台湾総督府警察官及司獄官練習所で関係のあった森孝三²⁸の書翰が多数存在する(93、94、134頁)が、同氏の上記台湾総督府警察官及司獄官練習所関係のものとしては、年代不明のものが一通ある(93頁)。(平成22年10月25日追加)

・「ヨミダス歴史館」(明治・大正・昭和の読売新聞記事紙面)

昭和4(1929)年4月15日(月)夕刊第2面(2/6頁)「後藤伯の遺骸帰る」(2~3行目に、「故人と少年時代からの知合である」湯目補隆の言動が出ている。後藤伯：1857.7.24~1929.4.13(京都で逝去)) (平成22年10月25日追加)

・鶴見祐輔(1885~1973)編『後藤新平』(全4巻、後藤新平伯伝記編纂会、第1巻昭和12年4月13日刊、第2巻昭和12年7月20日刊、第3巻昭和12年10月20日刊、第4巻昭和13年7月25日刊。勁草書房復刻版：第1巻昭和40年7月10日刊、第2巻昭和40年9月10日刊、第4巻昭和42年8月5日刊(索引もあり。))中、第1巻

²⁸ 森孝三につき、取り敢えず、前掲『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』(台湾総督府警察官及司獄官練習所、明治42年3月10日刊)16、22、23、25、26、28、29頁参照(平成22年10月25日追加)。

642～646 頁 湯目補隆「片山國嘉の弁妄書を読む」あり（「後相馬事件」関連、「伯〔後藤新平〕と多年の知己たりし湯目補隆は、……」の記載あり。明治 27（1894）年 3 月 17 日片山國嘉（1855～1931）は新聞各紙に「後藤新平の証妄を弁ず」を發表。）。

（参考：同第 1 巻 352～354 頁に後藤新平『衛生制度論』（東京・忠愛社、明治 23 年 9 月刊。復刻版：大空社、平成 4 年 10 月刊。国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵）の記述あり。同書は後藤の明治 21 年又は 22 年に於ける警官練習所での講述を編修したもの）、第 2 巻 9 頁（児玉総督と台湾の関係）、107～108 頁（児玉総督就任前の台湾）、152～153 頁（台湾警官練習所制度の創設））（平成 21 年 11 月 1 日追加、同 11 月 11 日修正、同 11 月 23 日再修正）

・鶴見祐輔『（決定版）正伝 後藤新平 2 衛生局長時代 1892～98 年』（一海知義（1929～）・校訂、藤原書店、平成 16 年 12 月 30 日刊）205、220～229「片山國嘉の弁妄書を読む」（相馬事件関連）、233 頁（平成 21 年 11 月 1 日追加）

・鶴見祐輔『（決定版）正伝 後藤新平 3 台湾時代 1898～1906 年』（一海知義・校訂、藤原書店、平成 17 年 2 月 28 日刊）21、138、191、192 頁

・御厨貴（1951～）編『後藤新平大全 正伝 後藤新平 別巻』（藤原書店、平成 19 年 6 月 30 日刊）（平成 21 年 11 月 23 日追加）

(2) 鷺巣敦哉関係

・『鷺巣敦哉著作集 I』（緑蔭書房、平成 12 年 12 月 10 日刊。親本：『警察生活の打明け物語』（鷺巣敦哉：1896～1942。自己出版、昭和 9 年 2 月 15 日刊））「はしがき」の次に掲載の「ゆはれ深き練習所門柱の由来記」（台湾総督府警察官及司獄官練習所門柱の文字を書きし人は、湯目補隆の父湯目隆善とのこと、当時 87 歳。正門：明治 32（1899）年 9 月竣工）

・『鷺巣敦哉著作集 II』（緑蔭書房、平成 12 年 12 月 10 日刊。親本：『台湾警察四十年史話』（自己出版、昭和 13 年 4 月 28 日刊））102、287 頁（台湾で湯目補隆関係の有名な事件が発生した記述がある。）

・『鷺巣敦哉著作集 V』（雑誌所収著作。緑蔭書房、平成 12 年 12 月 10 日刊）303 頁（上記事件のこと）

(3) 秋田高校史、仙台一高史関係

・『秋高百年史』（秋田県立秋田高等学校同窓会、昭和 48 年 9 月 1 日刊）口絵 7 頁：湯目校長肖像（第 2 代、明治 43 年 9 月～大正元年 10 月）、本文：120、122、146、151～154、156 頁（うち、同書 155～156 頁所掲の池見元一（秋中大正 6 年卒）「明治人間の中学生」中に、「入学当初の校長は湯目補隆・・・後年小生、仙台税務監督局鑑定部に勤務した時、先輩技師に湯目己九郎という人がおられ、・・・この技師の叔父に当たられる人の由で・・・」とある（156 頁）。）（（ ）のみ、平成 22 年 1 月 24 日追加）

・『仙台一中、一高百年史』（宮城県仙台第一高等学校創立百周年記念事業実行委員会、

平成 5 年 1 月 30 日刊) 口絵 7 頁: 湯目校長肖像 (第 16 代、明治 28 年 9 月～29 年 7 月)、
本文: 34、35、562、563 頁

(4) 上村直己氏関係 (平成 22 年 1 月 24 日追加)

- ・上村直己 (1939～) 「警官練習所の訳官たち」『日本古書通信』第 677 号 (昭和 60 年 12 月号、同年 12 月 15 日刊) 3～5 頁 (湯目補隆、久松定弘、大井和久、賀来熊次郎)
- ・上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』 (多賀出版、平成 13 年 3 月 31 日刊) (久松定弘、賀来熊次郎に、各一章を設けて論じている。久松定弘 (1857～1913) : 57～79 (「第 3 章 久松定弘と『独逸戯曲大意』」)、139、206、207 頁。大井和久: 63、145、206、207、289 頁。湯目補隆: 62、63、206、207 頁。賀来熊次郎 (1860～1939: 52、53、63、201～219 (「第 5 章 第五高等学校教授 賀来熊次郎」)、285 頁。))
- ・上村直己『近代日本のドイツ語学者』 (鳥影社、平成 20 年 10 月 7 日刊) (湯目補隆: 70 頁、久松定弘: 70 頁、大井和久: 13、72 頁、賀来熊次郎: 5、57、396 頁) (平成 22 年 1 月 31 日追加)

(5) 石川實氏関係 (平成 29 年 8 月 31 日新設追加)

- ・石川實「日本におけるフォイエルバッハの受容とその系譜 (1) 一久松定弘の場合をめぐって一」『立正大学哲学・心理学会紀要』第 27 号 (立正大学哲学・心理学会、平成 13 年 3 月刊) 19～21 頁 (湯目補隆関係分) ⇒湯目補隆令室千重氏が久松定弘氏令妹であることに言及。
 - ・石川實「明治初期社会思想論考一久松定弘の『米国官海濱話』を中心として一」手川誠士郎先生古稀記念論文集編集委員会編『存在の意味への探求 手川誠士郎先生古稀記念論文集』 (秋山書店、平成 23 年 3 月 27 日刊) 186～187 頁 (湯目補隆関係分) ⇒湯目補隆逝去年が昭和 11 (1936) 年であることに言及 ⇒平成 29 年 7 月に石川氏より逝去年月日は「昭和 11 年 10 月 31 日」であることを教示される。
 - ・石川實「久松定弘と湯目補隆の研究回顧」『大警視だより』続刊第 5 号 (通巻第 34 号、大警視川路利良研鑽会、平成 30 (2018) 年 1 月 1 日刊) 4～5 頁 ⇒湯目補隆親族について貴重な記述がある。(平成 29 年 11 月 26 日追加)
- ⇒同稿は、その後警察政策学会資料第 110 号『近代警察史の諸問題一川路大警視研究を中心に一』 (警察政策学会、令和 2 (2020) 年 5 月 8 日刊。〈<http://www.asss.jp/>〉にアップ済。) 165～167 頁に再録。(令和 4 (2022) 年 7 月 15 日追加)

(6) 亀井兎夢氏関係 (平成 29 年 9 月 23 日新設追加)

※先に本稿「(略年譜 1) 全体抄」中で下記を掲載した。再掲しておく。

「・G.L.ウルメン著・亀井兎夢 (とむ、1910～2000?) 監訳『評伝 ウィットフォーゲル』 (新評論、平成 7 年 1 月 20 日刊。ウィットフォーゲル: 1896～1988) 奥付の「監訳者紹

介」に、「1910年12月29日東京（旧）下谷に生れる（久松定弘の六男）。1933年亀井家の養子となる。1928年東京府立一商卒。日大経済学専門部（ママ）2年で中退後、叔父湯目ノ補隆（ママ）（元大阪高校（大阪大学）仙台2（ママ）高（東北大学）の校長）の私塾にて勉学」とある。以下、一、二検討しておく。なお、同書に「監訳者あとがき 「現代の予言者」 —ウィットフォーゲル氏の著書から六十年にわたり教え導かれる—」（879～883頁）があるが、ここには湯目補隆への言及記載はない。（平成27年4月19日追加）」

※その後。亀井兎夢氏（1910～2000）『週刊埼玉』掲載記事を検索した（平成29（2017）年秋某月某日某図書館で一部確認。ただし、欠号多々あるため、詳細不明。）。不十分ではあるが、関係記事としては、次のものがある。

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%80%E4%BA%95%E3%83%88%E3%83%A0>〉
〈<http://jgaxy.tumblr.com/post/60823773454/%E4%BA%80%E4%BA%95%E3%83%88%E3%83%A0%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%84%E7%AB%8B%E3%81%A1%E3%81%A8%E7%8B%AD%E5%B1%B1%E6%8E%A8%E7%90%86>〉

亀井兎夢氏の青春回顧録（8回、表題は毎号変化しているのでここでは一部のみ記載した。執筆者名義：「本紙主筆 亀井トム」）

- ・(1) 第1224号、昭和60（1985）年1月15・25日（合併号）第4面（「はからずも青春を思い出す」）
 - ・(2) 第1226号、昭和60（1985）年2月15日第4面（「病院で点滴をうけながらの回想」）
 - ・(3) 第1229号、昭和60（1985）年3月15日第2面（「病室での思い出 父久松定弘の思想家・官僚の二つの歩み」）
 - ・(4) 第1230号、昭和60（1985）年3月25日第2面（「父・久松定弘の回想」）
 - ・(5) 第1232号、昭和60（1985）年4月15日第2面（「父・久松定弘の回想・演劇論」）
 - ・(6) 第1234号、昭和60（1985）年5月5日第2面（「父・久松定弘の回想・晩年のショック」、湯目補隆関係記載あり〈「講談本とハイネをよむ久松」項目中〉⇒湯目補隆夫人が久松定弘令妹とのこと、湯目令息のこと等に言及。）
 - ・(7) 第1236号、昭和60（1985）年5月25日第2面（「父・久松定弘の回想・オイの理研所長 [大河内正敏（1878～1952）]」）
 - ・(8・完) 第1238号、昭和60（1985）年6月15日第2面（「父・久松定弘の回想・オイの理研所長 [大河内正敏]」）
- （その他）
- ・「“敗戦の日”の思い出（その1）」第478号、昭和39年8月22日第2面（筆名：亀井主筆）
 - ・「“敗戦の日”の思い出（その2 [完]）」第480号、昭和39年9月6日第2面（筆名：亀井主筆）
 - ・「敗戦前、三年間の海軍の思い出【その1】」第1290号、昭和61年11月25日第2面（筆名：亀井トム）
 - ・「敗戦前、三年間の末期海軍の思い出【2】」第1295号、昭和62年1月15日第2面（筆名：本紙編集長 亀井トム）

- ・「ウィットフォーゲルは一貫して「現代の予言者」である マルクスは継がれ誤りと不足が明白に訂正された」第 1583 号、平成 7 年 2 月 25 日第 2 面（週刊埼玉社長亀井兎夢）
- ・「評伝ウィットフォーゲル ウルメン原著・・・亀井兎夢監訳（発売三ヶ月で五〇%売上突破）」第 1592 号、平成 7 年 5 月 25 日第 1 面（出版案内、新評論、平成 7 年 1 月 20 日刊、定価 15,000 円）

(7) 台湾・『警察監獄学雑誌』の件（平成 26 年 12 月 23 日追加）

本 HP 別稿「明治 35（1902）年台北刊行の『警察監獄学雑誌』検討一斑―湯目補隆検討補遺―」（HP 初出：平成 22（2010）年 4 月 18 日初稿作成）参照。

[〈http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kangokugaku.pdf〉](http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kangokugaku.pdf)

(8) その他-1

・池田哲郎（1902～1985）「本邦におけるドイツ学の創始について―蘭系ドイツ学書志―」『福島大学学芸学部論集』第 14 号（昭和 38 年 3 月刊）61～77 頁（湯目補隆：65 頁）（平成 22 年 1 月 24 日追加）

[〈http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/dspace/bitstream/10270/2899/1/5-48.pdf〉](http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/dspace/bitstream/10270/2899/1/5-48.pdf)

・草鹿丁卯次郎（1867～1931、当時学習院助教、下谷区西黒門町四番地）『独和会話篇』（須原鉄二、明治 19（1886）年 1 月 25 日刊）に、「北水湯目補隆」の漢文序（「識于進学舎南窓之下」とある。）あり。（近代デジタルライブラリー [〈http://kindai.ndl.go.jp/〉](http://kindai.ndl.go.jp/) 所蔵。最初『時事新報』明治 21 年 3 月 6 日第 6 面掲載の博聞本社広告により判明。平成 24 年 2 月 21 日追加）

・『第二高等学校一覧 自明治 27 年至明治 28 年』（第二高等学校、明治 28 年 1 月 26 日刊）87 頁（近代デジタルライブラリー所蔵）（平成 22 年 3 月 14 日追加）

・『第二高等学校史』（第二高等学校尚志同窓会、昭和 54 年 10 月 26 日刊）261 頁に見える同校独語講師「湯目補隆」は、おそらく湯目補隆の近親者と思われるが、関係等不明。同氏の写真（明治 43（1910）年 5 月 10 日撮影）として、下記サイトがある。また、前掲上村直己『近代日本のドイツ語学者』（鳥影社、平成 20 年 10 月 7 日刊）279 頁では、同氏は、明治 33（1900）年 9 月時点では第四高等学校講師との由。

[〈http://webdb3.museum.tohoku.ac.jp/tua-photo/photo-img-l.php?mode=i&id=D06-2-008-003〉](http://webdb3.museum.tohoku.ac.jp/tua-photo/photo-img-l.php?mode=i&id=D06-2-008-003)

なお、同氏につき、『仙台人名大辞書』（仙台人名大辞書刊行会、昭和 8 年 2 月 5 日刊。復刻版：仙台郷土研究会内統仙台人名辞書刊行会、昭和 56 年 3 月 1 日刊）1074 頁「湯目重久」、前掲上村直己『近代日本のドイツ語学者』（鳥影社、平成 20 年 10 月 7 日刊）279 頁（明治 33 年 9 月時点では四高講師の由）各参照。前記「湯目重久」からすると、おそらく本家筋の方か。（平成 22 年 3 月 14 日修正）

・平成 29（2017）年 7 月、石川實氏より乃木家墓所（青山霊園 1 種口 10 側 26 番）水盤の銘文は湯目補隆作との教示を受ける。（平成 29 年 9 月 3 日追加）

〈<http://www.uchiyama.info/oriori/shiseki/bochi/tokyo/nogi/>〉

〈<http://hizou.30maps.com/map/117614>〉

(水盤銘文) (上記アドレスのものに拠る。)

乃木將軍及夫人之墓、來拜墓者士女成群、爭奉榊、枝供香花、薦錢幣、香火恐爲災、錢亦無所用、乃揭榜謝止二物、而堆積之錢、已有數十圓、會軍艦津輕號下士卒三百四十人集金十有八圓、以見贈露國貨五留、米國桑港婦人某氏又寄以其國幣五弗、其金總至七十四圓五十錢有奇、蓋中外人士感嘆金欽望之深、至此已然將軍高潔廉介、一豪不取於人、未知神靈、果受之否也、而斥還之亦不可、於是乎湯地・塚田・大館・玉木諸氏相議、以其財、造石盤一基、置諸墓側、以供衆人洗手之用、庶幾不虛諸君至意、而神靈亦不必拒斥也、

大正二年五月十三日 湯目補隆謹識

・湯目補隆の嚴父湯目隆善の事績につき下記のブログ記事「仙台 明治の断片」は参考となる。『奥羽日日新聞』の記事を中心にしたものとの由である。(平成 29 年 9 月 3 日追加)

〈<http://sucre1800.blog17.fc2.com/category7-7.html>〉

「神道支局開場 (明治 21 年 1 月 7 日)

2008 年 06 月 17 日

牡鹿郡湊村に石巻神道支局を設け去る五日其開場式を執行せしが先づ局長権大講義湯目隆善氏祭主となりて祭典を行い終わりにて直会の宴を開きしが来会者四十余名湯目畠山山崎等諸氏の演説もあり参会は午後四時頃にて頗る盛典なりしという」

(9) その他-2

ア 平成 25 (2013) 年 10 月 9 日さる識者より教示を受けた湯目補隆関係資料は、次のとおりである。厚く御礼申し上げるものである。(平成 25 年 10 月 31 日追加)

(ア) 湯目補隆の経歴、没年月日、墓所等関係調査。ただし、関係記述は存在せず。

- ① 古山省吾編『中央之旧仙台藩人調』宮城県顕揚会,1917.
- ② 宮城縣史研究會編輯『宮城縣史』宮城縣史刊行會,1934.
- ③ 湯目隆績『回顧五十周年ノ沿革』湯目隆績,1938.
- ④ 宮城県名士宝鑑発刊事務所編『宮城県名士宝鑑』宮城県名士宝鑑発刊事務所,1940.
- ⑤ 玉沢清編『宮城人名録 1』玉沢清, [昭和] .
- ⑥ 河北新報社編集局資料課『河北年鑑』河北新報社 (昭和 11-13 年版)

(イ) 下記資料に湯目補隆に関する記述あり。

- ⑦ 第二高等学校同窓会編『会員名簿』第二高等学校同窓会,1935.

14 頁。(「本校旧職員」の項)「湯目補隆／東京／／講師／／東京市小石川区関口台町五一問心書院」

*記載事項は氏名／原籍／学位称号／官職名／勤務先職名／住所。

- ⑧ 第二高等学校同窓会編『会員名簿』第二高等学校同窓会,1936.10.

14 頁。(「本校旧職員」の項)「湯目補隆／東京／／講師／／東京市小石川区関口台町五一問

心書院」

*記載事項は氏名／原籍／学位称号／官職名／勤務先職名／住所。

⑨ 第二高等学校同窓会編『会員名簿昭和 13 年』第二高等学校同窓会,1938.11.
20 頁. (「旧職員死亡者」の項)「湯目補隆／東京／／講師」

⑩ 芳賀登[ほか]編集『日本人物情報大系 6』皓星社,1999.7.[281.08/1999.7/6]
251 頁.「湯目チイ子安政六年三月生●湯目補隆氏夫人△小石川区関口台町一五」

*同書に収録の『初版大日本婦人録』（婦女通信社,1908）の 893 頁に掲載。

（註：石川實氏によれば、「湯目補隆氏令室（先妻）千重〈ママ〉氏は久松定弘氏令妹」とのことである由。（平成 29 年 11 月 26 日追加）

イ 国立国会図書館次世代デジタルライブラリーですべて再検索の要ありか。

〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉（令和 4（2022）年 4 月 1 日追加）

（了）